名画の扉

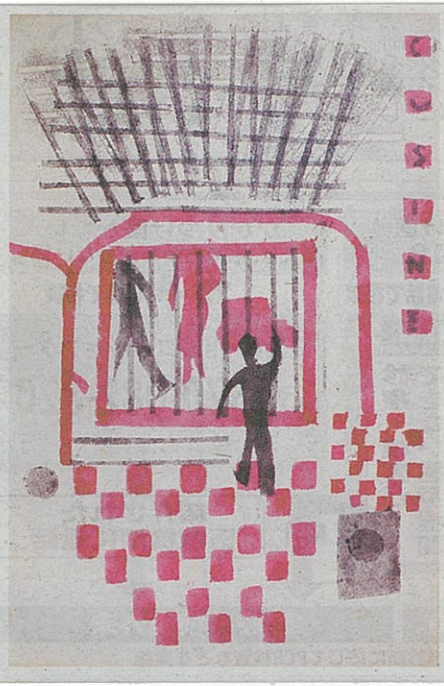
大川美術館「茂田井武―パリ青春日記 ton parisを中心に」展から

「到着早々働く事となりぬ コック場は半分地下にありて 往来の人馬、たゞ足のみ見ゆ」

茂田井武（1908～56年）

1930～33年　水彩、色鉛筆紙、22・2㌢×15・1㌢

茂田井武は、1930（昭和5）年、シベリア鉄道経由で単身パリにやってきました。22歳の青年の目に、当時の「芸術の都」といわれていたパリはどのように映ったのでしょうか。資金があっての留学ではなく、まったく無一文に近い無謀な旅だったようで、さっそく働かなくてはならなかったのです。ありついた職は、日本人のためのクラブの食堂の皿洗いでした。

この私家版の画帖（がじょう）「ton paris」に残された100点におよぶ小品には、そうして始まったパリでの生活が描かれています。そして絵に添えた茂田井自身の書き込みをそのまま作品の題名にしてご覧いただいています。貧しい生活の実感とそれだけではない機知やユーモア、そして繊細な詩情が、一つ一つの作品にこめられています。

今回から4回にわたって、童画家茂田井武の原点となったこの画帖から紹介していきます。（田中）